

## 研究論文

都市住民のパーソナルネットワークの機能・構造分析<sup>1)</sup>

～地域互助による生活課題の解決を考える基礎として～

大槻 知史<sup>2)</sup>The functional and structural analysis of city habitant's personal network in Kyoto  
—For exploring the possibility of the solution of life problems by using “local mutual aid”—

OTSUKI Satoshi

A purpose of this research is to examine the possibility of using local mutual aid, to solve problems for a daily life. This research has three analyses for a data gotten by the questionnaire. This questionnaire was answered by the inhabitant of “Honno-gakku”, a school district which decided by city government, in Kyoto: (1) Analyzing decisive factors of personal-network, (2) classifying urban habitants from a structure of personal-network, (3) analyzing functions of personal-network.

The results of three analyses are as follows:

- (1) The author could find information which resulted in previous researches.
- (2) The author could reclassify a residential area of a respondent into 4 personal-networks (Neighborhoods, Gakku, Inner-city which an area of Kyoto city, except the Gakku of a respondent, Outer-city which means an area outside Kyoto city). And, 4 personal-networks (Variable) were analyzed by cluster-analysis. As the result, inhabitants in Kyoto city were classified into 4 types, in terms of a structure of the personal-network.
  - Type 1 is “Single network,” which shows a dependence on “Outer-city-network.”
  - Type 2 is an “Outside network,” which shows the dependence on both “Inner-city-network,” “Outer-city-network.”
  - Type 3 is a “in-residential area-network” and “Outer-city-network,” which shows a dependence on “Neighborhood-network,” “Gakku-network” and “Inner-city-network.”
  - Type 4 is a “Large scale network,” which shows a dependence on “Neighborhood-network,” “Gakku-network,” “Inner-city-network,” and “Outer-city-network.”
- (3) Volumes of personal-network (dependent variable), the volumes of social support (dependent variable), and the personal-network dependent variable, for a self-evaluation (independent variable) are analyzed by multiple-linear regression analysis.

Through analysis, I had the following conclusions:

- The personal-network which is important for home-owners and tenants in an apartment is the network (“Neighborhood-network” and “Gakku-network”) in their residential area.
- A volume of “Positive-support” is not reflected to the self-evaluation from the personal-network.
- (A volume of “Negative-Support” influences a self-evaluation for personal-network in a negative support.

**Key words** : Personal-network, Social-support, Positive-support, Negative-support, local mutual aid, classification

**キーワード** : パーソナルネットワーク、ソーシャルサポート、ポジティブサポート、ネガティブサポート、地域互助、類型化

1) 本稿は鐘ヶ江秀彦立命館大学政策科学部助教授の指導を受け執筆した。

2) 立命館大学大学院政策科学研究科博士課程後期課程

## はじめに

### - 1. 本稿の背景

近年、防犯、防災<sup>1)</sup>、高齢者支援<sup>2)</sup>、子育て支援など、住民の生活課題について行政による「公助」や市場からの財・サービスの取得に代表される「自助」で補いきれない領域を地域社会(local community)による「互助」の活用でカバーしようとする取り組み、あるいは主張が見られる<sup>3)</sup>。

しかしながら都市の現状に目を向けてみると、住民の同質性の変容は、もはや同地域の住民であるというだけで共通の生活様式や価値観、さらには生活課題を持っているとは到底いえない状況を創り上げている。一方で都市住民は、血縁関係や社縁、関心縁などを通じて多様な人間関係を築いており、地域社会はもはや住民を包括する存在ではありえなくなっている。このような現状を踏まえると、現状分析を行わないままに地域互助による生活課題の改善に過大な期待を寄せることは、本来、行政部門あるいは市場部門の整備により対処すべきである領域・対象に空白を作ることにつながりかねないのではないと考えられる<sup>4)</sup>。

都市において住民の生活課題の解決手段として地域互助の活用を考える際には、対象となる住民が地域社会とどのような関係にあり、そこからどのような作用を受け取っているのか、言い換えるならば、個人が社会生活を営む上で地域社会がどのような価値を持っているのかを詳細に把握することが必要であると考えられる。

### - 2. 本稿の目的

このような問題意識を踏まえ、本稿では、パーソナルネットワーク<sup>5)</sup>分析の手法を用いて、都市住民の人間関係のうち特に親しいネットワークについて造面・機能面の双方から分析し、その中で居住地ネットワークの位置づけを明

らかにすることを目的とする。これにより、現在の都市において住民の生活課題の解決手段として地域互助の活用を考える際の一視点を提供することを目指している<sup>6)</sup>。

もちろん、実際に特定の地域において特定の生活課題の解決を志向するために調査を行う場合には、分析対象とする住民や分析対象項目などを詳細に絞り込むことが必要である。

本稿はこれらの分析を行う一段階前の基礎的分析として、都市住民のパーソナルネットワークの構造・機能についての概略をつかむことを意図している。

### - 3. 本稿の特色

#### - 3-1. パーソナルネットワーク構造からの住民の類型化

パーソナルネットワーク分析の研究事例においては、各種ネットワーク量(ネットワーク総量、地域範囲別ネットワーク量、つきあいの種類別ネットワーク量など)を従属変数、個人属性を独立変数とした分析により各種ネットワークに対する規定変数を明らかにする研究<sup>7)</sup>(あるいはその発展形として属性グループごとに規定変数の種類、効果の大小を比較する研究)が多く行われている。

しかし、上記の分析方法では各種ネットワーク量に対する規定変数は明らかにできるものの、具体的に住民のパーソナルネットワーク構造にはどのようなパターンがあり、各パターンがどのような個人属性と関連が深いかを明らかにすることはできない。しかしながら、実際にパーソナルネットワークの活用による地域互助を考える際には、このような住民の類型化こそが非常に有益な重要な情報であると考えられる<sup>8)</sup>。

このような視点から本研究では、各種ネットワーク量の規定要因を明らかにするアプローチとあわせて、地域範囲別のネットワーク量を投入変数としたクラスター分析によりパーソナル

ネットワーク構造から住民を類型化した上で各類型と関連の深い属性を明らかにするアプローチを選択する。

その上で、パーソナルネットワークの各類型について、つきあいの種類や獲得しているソーシャルサポートを分析する。

### - 3 - 2 . ソーシャルサポート概念の援用によるパーソナルネットワークの機能分析

人間関係を各個人が持つ社会的資源として捉えるソーシャルサポートの考え方は都市社会学におけるパーソナルネットワーク研究にも多大な影響を与えており、人間関係を機能の側面から計る変数として大きく利用されている。しかし、人と人の関係が結びついたら結果、相手を心理的に不快にさせたり、あるいは経済的、社会的な負担を与えたりすることは、当然に起こり得ることであり、パーソナルネットワークを資源として評価する際には、ポジティブな側面だけでなく、このような否定的な作用についてのリスク・あるいはコストを踏まえた上で判断することが必要である。

このような観点から、本稿では、一般的なソーシャルサポート概念とあわせて人間関係の否定的作用であるネガティブサポートの概念も導入し、パーソナルネットワークが提供する作用を、正負の両面から評価する。これにより、機能面からも住民とパーソナルネットワークの関係を明らかにする。

### - 4 . 本稿の構成

本稿の構成は、以下の通りである。

・ 調査の概要：調査設計に当たって行った概念整理について記述するとともに、調査地の設定・調査方法および、回収データの概略および留意点を説明する。

・ パーソナルネットワークの構造分析と類型化：個人属性を独立変数に、各種ネットワーク量を従属変数とする分析（分散分析および数量化 類）によりパーソナルネットワークの規定要因を明らかにする。また、パーソナルネットワーク構造の類型化を行い、その関連属性を明らかにすると共に、類型ごとにどのようなつきあいの種類と関連が深いのかを明らかにする。

・ パーソナルネットワークの機能分析： 行った住民類型ごとにソーシャルサポート（ポジティブ・ネガティブ）との関連を明らかにし、機能面からパーソナルネットワークの実態を明らかにする。

・ パーソナルネットワーク・ソーシャルサポートとひとづきあいの満足度の関連分析：ソーシャルサポートの獲得量とひとづきあいに対する評価の関係を分析し、パーソナルネットワークおよびソーシャルサポート（ポジティブ・ネガティブ）が、ひとづきあいの満足度とどのような関連があるかを明らかにする。

・ まとめおよび考察：本稿によって得られた知見を整理した上で、生活課題の解決手段として地域互助の活用を検討する際に本稿の分析結果および分析枠組みがどのような意味があり、また今後どのようなアプローチの改善が必要であるかを検討する。

## ・ 調査の概要

### - 1 . 調査設計に当たっての概念整理

#### - 1 - 1 . ソーシャルサポート概念の整理

#### (1) ソーシャルサポートとネガティブサポート

ソーシャルサポートとは、コミュニティ心理学、老年社会学等の分野で使用される概念であり、平たく言えば、「個人が各々の人間関係が

ら獲得している（肯定的）作用」である。その定義は様々であるが、ソーシャルサポート概念の根幹にあるのは、人間関係を個人が社会生活を行う上での支援提供源として積極的に評価し、個人の生活課題を解決するために活用しようとする視点である。

ソーシャルサポート概念の成立当初は、人間関係がもたらす肯定的作用のみが注目されていた。しかし90年代に入り、人間関係がもたらす否定的な作用についても計測し、そのメリットとデメリット、あるいはベネフィットとコスト・リスクのバランスによって個々の人間関係を資源評価しようという視点が登場し、人間関係がもたらす否定的作用がネガティブサポートとして概念化された<sup>9)</sup>。

サポートという用語はもともとポジティブな含意があり、「ネガティブサポートという言い方は一種の形容矛盾<sup>10)</sup>」であるが、あくまでも人間関係が引き起こす作用を社会的資源として積極的に捉えるソーシャルサポート論の枠組みの中で、注意を払うべき否定的作用として設定された概念であるため、このような名称がつけられたと考えられる。

ネガティブサポート概念はソーシャルサポート概念の下位概念であり、ソーシャルサポート概念の中にポジティブサポート概念とネガティブサポート概念が包摂されると考えられる。このため本稿においては、ソーシャルサポートと記述した場合は、人間関係の肯定的作用・否定的作用の双方を含むものとする。なお、肯定的作用のみに着目する場合には、ポジティブサポート、否定的な作用に着目する場合はネガティブサポートと記述する。

## (2) 調査設計への反映

本稿での調査においては、野口<sup>11)</sup>によるポジティブサポート・ネガティブサポートの測定尺度の開発研究において提示された測定項目を参

考に、ポジティブサポート、ネガティブサポートそれぞれについて以下のような測定項目を設定した。

### ポジティブサポート

#### A. 情緒的サポート

- ・心配事や悩み事を聞いてくれた（相談）
- ・励まして元気づけてくれた（激励）
- ・気持ちをリラックスさせてくれた（安息）

#### B. 手段的サポート

- ・お金・モノの貸借や援助をしてくれた（物的援助）
- ・生活の用事やお手伝いを引き受けてくれた（人的援助）
- ・病気の時に看病やお世話をしてくれた（看病・看病）

#### C. 交遊サポート

- ・一緒に遊んだり楽しんだりしてくれた（交遊）

### ネガティブサポート

- ・あなたをイライラさせる
- ・小言や文句を言う
- ・余計な世話を焼きすぎる
- ・あなたに迷惑をかける
- ・おつきあいに気を使う

ポジティブサポートのC. 交遊サポートは、野口の調査項目にはない項目である。しかし、一緒に交遊し楽しみを得ることは、人間関係が果たす重要な機能の一つであり、また、獲得する機会の多い作用であることから、本研究において1項目として取り入れた。

ネガティブサポートの「おつきあいに気を使う」も筆者が独自で設定した項目である。本項目は相手から受ける否定的作用というよりも、人間関係の成立・維持に対する自身の負担感であり、厳密にはネガティブサポートとはいいか

なる。しかしながら、このような人間関係への負担感はパーソナルネットワークを維持する上での大きな障壁であり、パーソナルネットワークの維持・拡大を妨げる大きな要因であると考えられることから、本研究において1項目として取り入れた。

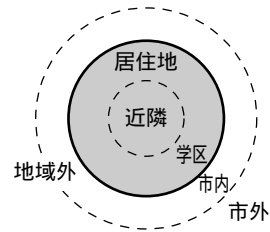


図1：本稿における地域範囲の分類

## - 1 - 2 . 本稿における「居住地」の範囲

本稿の目的は、地域互助による生活課題解決の可能性を探る基礎的研究として、都市住民のパーソナルネットワークにおける居住地ネットワークの位置づけを明らかにすることである。しかしながら、都市社会学において「居住地」（あるいは「地域」）という語句が定義する地理的範囲は非常に多様であり、明確な範囲設定がないまま議論を行うと大きな混乱が生じる危険性がある。本節では、本稿でいう「居住地（地域）」の範囲を定義したい。

都市社会学において「地域」が定義する範囲については今野<sup>12)</sup>の整理が分かりやすい。今野によると、都市社会学において一般的・抽象的な意味で「地域」という場合は、市町村単位程度の自然都市であり、一方、コミュニティ研究の分野において「地域」という場合は地域コミュニティの成立範囲として小学校区程度の小地域が設定されている、としている。

本稿における「居住地（地域）」は、特別の断りがない限りコミュニティ研究の分野における小地域程度の範囲を指すこととし、それより空間的に外部の範囲については「地域外」と表現する。その上で、本稿では「居住地（地域）」、「地域外」をさらに以下のように細分化し、地域範囲ごとにパーソナルネットワーク量や、つきあいの種類、ソーシャルサポート獲得量を比較する（図1）。これにより都市住民のパーソナルネットワークがどのような構造になっているのか、その中で、居住地ネットワークはどのような位置づけとなっているのかを明らかにする。

### 居住地（地域）

- ・近隣：向こう十軒程度の地域範囲
- ・学区：「近隣」の外側に広がる小学校区程度の地域範囲

### 地域外<sup>13)</sup>

- ・市内：「学区」の外側に広がる30～40程度の範囲
- ・市外：「市内」の外側に広がる地域範囲

上記のような詳細な定義を設定した理由は、「地域（居住地）」内であっても、その空間的範囲により、つきあいの種類やパーソナルネットワークから獲得しているソーシャルサポートが異なることが想定されるからである。具体的には、「近隣」においては「近所づきあい」が、「学区」においてはそれよりも選択性の高い「友人づきあい」が選択されやすいと考えられる。それに伴い、「近隣」では「生活の用事やお手伝い」などの手段的サポートが、「学区」においては交遊サポートや情緒的サポートが獲得されやすいと考えられる。

## - 2 . 調査対象地の設定

### - 2 - 1 . パーソナルネットワーク分析における2つのアプローチ

都市においてパーソナルネットワークを研究する際は、具体的にどのような地域を調査対象地として選択するかが常に問題となる。なぜならば一口に都市地域といっても、都市部の特徴を全て備えた地域というものは存在せず、対象

地域が都市構造においてどのような位置づけの地域であるかによって住民の属性や生活様式のパターンは大きく異なるからである。上記の問題に対する解決策としては、大きく2つのアプローチが存在する。

一つ目のアプローチは、調査対象とする都市における各地域の住民を無作為に抽出してその集合を分析することにより都市地域におけるパーソナルネットワークの実態とみなす方法である。しかし、先に述べたように、内部地域ごとの異質性こそが都市の特徴であり、そのことを捨象して、多様な地域の情報を平均化した分析を行うことが果たして都市におけるパーソナルネットワークの構造・機能を明らかにすることにつながるか疑問が残る。

二つ目のアプローチは対象都市においてさらに地域を絞り込んだ上で調査を行うアプローチである。この方法であれば、ある都市の一定の地域においては、より正確で詳細にパーソナルネットワークの構造・機能を明らかにすることが可能である。しかし、対象とする都市全体について住民のパーソナルネットワークの構造を明らかにすることはできない。両アプローチには一長一短があるが、本稿の目的は、パーソナルネットワークの構造・機能を明らかにすることで地域互助による生活課題解決の可能性を探るものであり、限定された範囲であっても正確で詳細な構造を明らかにすることが必要であることから、後者のアプローチを選択する。

## - 2 - 2 . 調査対象地の決定

都市部における地域互助の可能性を検討するものであるという本稿の目的を踏まえ、地域住民間での人間関係の存在が仮定されること、

地域社会によるコミュニティ活動が行われていること、人口の流動化により、住民の同質性が変容していること、の3点を考慮して調査対象地を検討した。その結果、京都市中心部の

職住近接地区である京都市本能元学区を調査対象地として選択した。調査対象地の概要は以下の通りである。

調査対象地：京都府中京区本能元学区

- ・面積：1,97,000m<sup>2</sup>
- ・世帯：2007世帯<sup>14)</sup>
- ・人口：3,854人<sup>15)</sup>
- ・高齢化率：18.5%<sup>16)</sup>

京染めを初めとする伝統工芸職人の職住地区として発展した地域である。自治連合会（町内会の学区単位での連合体）主体のまちづくり委員会が活発に活動するなど地域社会の求心力が強い。一方で、マンション建設が急増し人口の半数近くをマンション住民が占めるなど、ジェントリフィケーションによる住民の異質化が急速に進行している。また、和装産業の衰退により一戸建て・長屋住民の中においても、若年層を中心に地域外で会社員として就職する住民が増加しており、生活様式の多様化によるパーソナルネットワーク構造の多様化が推測される。

## - 3 . 調査の方法

本稿で分析に用いるデータは、筆者が2003年11月に京都市中京区本能元学区で15歳以上の男女を対象に行った「日常的な交流と住みよいまちづくり調査」（以下、本調査）によるものである。調査の詳細は以下の通りである。

### - 3 - 1 . 調査の実施状況

本調査はその性質上かなりの回答抵抗が予想された。そこで本調査では自治連合会の協力を得た上で調査を実施した。調査全体での回収状況は、配布数1200に対して、回収数285（回収率23.8%）である。内訳は以下の通り。

初回調査

国勢調査<sup>17)</sup>を参考に本能元学区内の六町（柳

水町、六角油小路町、山田町、藤西町、越後町）を選択し、町内会の組長を通じて調査票の配布を依頼した。また、回収については郵送回収および組長による回収の2方法を用意した。回収状況は、配布数600に対して回収数260（回収率43.3%）であった。

#### 追加調査

初回調査においてマンション住民の回答者数が過少であったため本能学区内の二町（錦堀川町、蠟螂山町）のマンション住民を対象に訪問配布郵送回収による調査を行った。回収状況は、配布数600に対して回収数25（回収率4.2%）であった。

### - 3 - 2 . 調査項目

本調査での調査項目は以下の通りである。

#### 回答者の基本属性

（性別、年齢、職業、仕事をしている地域、就学歴、家族構成、同居子供・孫の就学状況、別居子供の有無、別居子供の居住地、居住形態、居住年数、いつの代から居住しているか、移住前の居住地、将来の居住予定）

#### パーソナルネットワーク関連変数

- ・ パーソナルネットワーク総量
  - ・ 各種パーソナルネットワークの詳細  
（対象者の性別、対象者の年齢、対象者の居住地、つきあいの種類、関係成立のきっかけ、親しくなったわけ、獲得しているポジティブサポート）
  - ・ ネガティブネットワーク総量
  - ・ 各ネガティブネットワークの詳細  
（対象者の性別、対象者の年齢、対象者の居住地、つきあいの種類、関係成立のきっかけ、与えられているネガティブサポート）
- 生活状況に対する自己評価  
（健康状態、経済状態、居住環境、生活満足度）

#### パーソナルネットワークに対する自己評価

町内会（自治連合会）への参加実態・意識・評価

本稿においては、上記調査項目のうち～までを用いて分析を行う。

パーソナルネットワークについての設問では、まず回答者が親しいと思っているひとづきあいの総数を思い浮かべてもらった<sup>18)</sup>。（同居・別居を問わず親子配偶者は対象外とした。また、同居している兄弟姉妹も対象外とした）

その上で、人つきあいそれぞれについて最大30件まで詳細項目（対象者の性別、対象者の年齢、対象者の居住地、つきあいの種類、関係成立のきっかけ、親しくなったわけ、獲得しているポジティブサポート）を回答してもらい、回答ボックスへの回答数（なんらかの意味がある回答がなされた数）を回答者のパーソナルネットワーク総量とした。

さらに、詳細項目をもとに地域範囲別パーソナルネットワーク量およびポジティブネットワーク獲得量を算出した。

一方、ネガティブネットワークについての設問では、まず、ネガティブなひとづきあいの有無を設問した（パーソナルネットワークと同じく、同居・別居を問わず親子配偶者は対象外とした。また、同居している兄弟姉妹も対象外とした）。

その上で、ネガティブな人づきあいが存在すると回答した回答者に対して、最大5件まで詳細項目（対象者の性別、対象者の年齢、対象者の居住地、つきあいの種類、関係成立のきっかけ、与えられているネガティブサポート）を回答してもらい、回答ボックスへの回答数（なんらかの意味がある回答がなされた数）を回答者のネガティブネットワーク総量とした。さらに、詳細項目をもとに地域範囲別ネガティブネットワーク量およびネガティブサポート獲得量を算出した。

#### - 4 . データの概要と留意点

##### - 4 - 1 . サンプルの偏りの検証

表1は本調査のサンプル数である。これを見るとマンション住民の回答者が50名と少ない構成となっている。また、マンション住民は性別においても女性に大きく偏っており、マンション住民についてはサンプル信頼性が低いといわざるを得ない。このため本稿においては、マンション住民については参考として分析するに留め、一戸建て・長屋住民との比較は行うがマンション住民内での比較は行わない。

次に一戸建て・長屋住民についてサンプルの偏りを検証する。サンプル数は210名である。性別×年齢層のクロス集計においてやや男女の偏りが見られるものの大きな偏りはみられない(表2)。また年齢層の分布についても高齢者の分布が多いものが高齢化が進むインナーシティー地域の現状をふまえれば妥当であると考えられる(表3)<sup>19)</sup>。このことからマンション住民以外の回答者については、サンプルの信頼性は十分に分析に耐えうると考えられる。

表1：調査データのサンプル数(居住形態別)

属性		度数	%
居住形態 (有効回答数：N=260)	持ち家(一戸建て)	148	57.0%
	持ち家(長屋)	35	13.5%
	借家(一戸建て)	18	7.0%
	借家(長屋)	9	3.4%
	分譲マンション	39	15.0%
	賃貸マンション・アパート	11	4.2%

表2：一戸建て・長屋住民の男女別回答者割合(男女別)

	男性	女性
20-39歳(若年層)	18 60.0%	12 40.0%
40-54(壮年層)	15 37.5%	25 62.5%
55-64(熟年層)	28 57.1%	21 42.9%
65-74(前期高齢層)	19 38.0%	31 62.0%
74(後期高齢者)	11 47.8%	12 52.2%
計	91 47.4%	101 52.6%

(有効回答数：N=192)

表3：一戸建て・長屋住民の男女別回答者割合(年齢層別)

	男性	女性
20-39歳(若年層)	18 19.8%	12 11.9%
40-54(壮年層)	15 16.5%	25 24.8%
55-64(熟年層)	28 30.8%	21 20.8%
65-74(前期高齢層)	19 20.9%	31 30.7%
74(後期高齢者)	11 12.1%	12 11.9%
計	91 100.0%	101 100.0%

(有効回答数：N=192)

##### - 4 - 2 . 回答者の属性

一戸建て・長屋住民について、回答者の属性のうち本稿での分析に係るものを素描すると以下ようになった。(表4)

表4：一戸建て・長屋住民の概要

属性	度数	%	
職業 (有効回答数：N=198)	会社員・公務員	41	20.7%
	自営業	56	28.3%
	無職・家事専業	80	40.4%
	パート・アルバイト	21	10.6%
家族構成 (有効回答数：N=198)	独居	17	8.2%
	配偶者と居住	179	62.8%
	未婚の子供と居住	44	40.4%
居住年数 (有効回答数：N=194)	10年未満	30	15.5%
	11-30年未満	45	23.2%
	31-50年未満	60	30.9%
	50年以上	59	30.4%
就学歴 (有効回答数：N=197)	小中学校卒	36	18.2%
	高校・専門学校卒	107	54.3%
	短大・大学・大学院卒	54	27.4%
健康状態 (有効回答数：N=209)	良い	93	44.5%
	普通	84	40.2%
	悪い	32	15.3%
家計状態 (有効回答数：N=206)	良い	35	17.0%
	普通	115	55.8%
	悪い	56	27.2%

職業については、無職・家事専業が40.4%と最も多くなっている。これは専業主婦および仕事を引退した高齢者であると考えられる。以下自営業28.3%、会社員・公務員20.7%、パート・アルバイト10.6%と続いている。自営業の



ほとんどは京染め等の伝統工芸の職人であると考えられ、職住近接地域としての特徴を良く表している。一方、会社員・公務員とパート・アルバイトをあわせると30%以上になり、職業の多様化が進んでいることがうかがえる。

年齢別にみると、20～39歳（若年層）、40～54歳（壮年層）においては会社員・公務員とパート・アルバイトをあわせると過半数を上回っている。特に20～39歳（若年層）では、自営業はわずか13.8%に留まっている。

家族構成についてみると、一人暮らしをしている人は、全体の8.1%となっている。

また、配偶者と同居している人は、全体の67.5%、高校生未満の子供・孫と同居している人は、全体の40.4%である。

居住年数についてみると、50年以上、30年以上50年未満がそれぞれ約30%を占めており、一戸建て・長屋住民のほとんどが長年居住しているいわば「旧住民」であることが分かる。

就学歴についてみると、高校・専門学校卒が54.3%と過半数を占めている。以下、短大・大学・大学院卒が27.4%、小・中学校卒が18.3%

と続いている。

健康状態については、良いが44.5%、普通が40.2%、悪いが15.3%となっている。

年齢別に見ると、20～39歳（若年層）の75%、40～54歳（壮年層）の53.5%が健康状態が良いと回答しているのに対して、65～74歳（高齢層）、75歳以上（後期高齢層）についてはそれぞれ、20%以下しか健康状態が良いと回答していない。

家計状態については、全体の55.8%が普通と回答しており、以下、悪いが27.2%、良いが17.0%となっている。

#### - 4 - 3 . パーソナルネットワーク関連変数の分布の偏りの補正

本調査において取得したパーソナルネットワーク関連変数（パーソナルネットワーク総量、地域範囲別パーソナルネットワーク量、各種ポジティブサポート獲得量、ネガティブネットワーク総量、地域範囲別ネガティブネットワーク量、各種ネガティブサポート獲得量）は分布が著しくゆがんでおり（表5）、そのままでは正

表5：パーソナルネットワーク関連変数の基礎統計量（対数変換前）

変数の種類		変数名	最小値	最大値	平均値	中央値	歪度	尖度	
パーソナルネットワーク関連変数	ネットワーク量	パーソナルネットワーク総量	1.000	30.000	4.959	4.000	2.908	11.667	
		近隣ネットワーク	0.000	4.000	0.575	0.000	1.171	2.514	
		学区ネットワーク	0.000	6.000	0.658	0.000	2.644	8.258	
		市内ネットワーク	0.000	17.000	2.110	1.000	2.777	11.410	
		市外ネットワーク	0.000	14.000	1.803	1.000	3.118	13.015	
	ポジティブサポート量	交遊サポート	0.000	17.000	3.164	2.000	1.937	5.197	
		相談サポート	0.000	11.000	2.288	2.000	1.597	2.713	
		激励サポート	0.000	15.000	2.151	2.000	2.493	8.207	
		安楽サポート	0.000	18.000	2.233	2.000	2.543	9.430	
		物的支援	0.000	2.000	0.302	0.000	1.968	2.320	
		サービス提供	0.000	5.000	0.753	0.000	1.736	2.480	
		看病看護	0.000	3.000	0.288	0.000	2.357	5.001	
	ネガティブネットワーク関連変数	ネットワーク量	ネガティブネットワーク総量	0.000	5.000	1.728	1.000	1.450	2.144
			近隣ネットワーク(ネガティブ)	0.000	3.000	0.658	0.000	1.381	0.986
学区ネットワーク(ネガティブ)			0.000	3.000	0.206	0.000	3.057	9.007	
市内ネットワーク(ネガティブ)			0.000	4.000	0.534	0.000	1.756	4.139	
市外ネットワーク(ネガティブ)			0.000	2.000	0.315	0.000	1.820	2.086	
ネガティブサポート量		あなたをイライラさせる	0.000	5.000	0.753	1.000	1.998	5.787	
		小言や文句を言う	0.000	2.000	0.534	0.000	0.743	-0.404	
		余計な世話を焼く	0.000	3.000	0.356	0.000	1.862	4.616	
		あなたに迷惑をかける	0.000	2.000	0.397	0.000	1.313	0.676	
		おつきあいに気を使う	0.000	3.000	0.822	1.000	0.713	-0.585	

表6：パーソナルネットワーク関連変数の基礎統計量（対数変換後）

変数の種類		変数名	最小値	最大値	平均値	中央値	歪度	尖度	
パーソナルネットワーク関連変数	ネットワーク量	パーソナルネットワーク総量	0.300	1.490	0.691	0.699	0.650	0.527	
		近隣ネットワーク	0.000	0.700	0.142	0.123	1.068	-0.219	
		学区ネットワーク	0.000	0.850	0.154	0.000	1.261	0.883	
		市内ネットワーク	0.000	0.126	0.373	0.301	0.422	-0.490	
		市外ネットワーク	0.000	1.180	0.303	0.301	0.823	-0.199	
	ポジティブサポート量	交遊サポート	0.000	1.260	0.514	0.477	-0.094	-0.433	
		相談サポート	0.000	1.080	0.418	0.477	-0.142	-0.695	
		激励サポート	0.000	1.200	0.388	0.477	0.378	-0.298	
		安楽サポート	0.000	1.230	0.396	0.477	0.279	-0.565	
		物的支援	0.000	0.480	0.770	0.000	1.796	1.530	
		サービス提供	0.000	0.780	0.170	0.000	1.018	-0.317	
		看病看護	0.000	0.780	0.170	0.000	1.018	-0.317	
	ネガティブネットワーク関連変数	ネットワーク量	ネガティブネットワーク総量	0.300	0.780	0.413	0.301	0.841	-0.283
			近隣ネットワーク(ネガティブ)	0.000	0.600	0.165	0.000	0.810	-0.718
学区ネットワーク(ネガティブ)			0.000	0.600	0.165	0.000	0.810	0.718	
市内ネットワーク(ネガティブ)			0.000	0.700	0.142	0.000	0.865	-0.456	
市外ネットワーク(ネガティブ)			0.000	0.480	0.085	0.000	1.539	0.786	
あなたをイライラさせる			0.000	0.780	0.194	0.301	0.596	-0.347	
ネガティブサポート量		小言や文句を言う	0.000	0.480	0.152	0.000	0.377	-1.476	
		余計な世話を焼く	0.000	0.600	0.101	0.000	1.113	-0.001	
		あなたに迷惑をかける	0.000	0.480	0.111	0.000	-0.981	-0.644	
		おつきあいに気を使う	0.000	0.600	0.209	0.301	0.264	-1.489	

規分布を仮定した分析に適さないため、本稿において分析の際は、特に断りを入れない限り常用対数を使用し（ $\log X + 1$ ）で対数変換した値を使用する。（表6）

## ・パーソナルネットワークの構造分析と類型化

### - 1. パーソナルネットワークの構造を規定する要因

本節では、住民の個人属性がパーソナルネットワークの構造に与える効果を分析することで、どのような属性がパーソナルネットワーク構造の規定要因となるかを明らかにする。

（なお、マンション居住群については、サンプル数の偏り等により分析の信頼性に疑問が残ることから、分析は行わない。）

まず、独立変数として基本属性（性別、年齢、職業、就学歴）、家族構成（配偶者と同居、高校以下の子供・孫と同居）、生活関連指標（健康状況、家計状況）の8変数を用い、相互に関連がないことを確認の上<sup>20)</sup>、パーソナルネットワーク量（ネットワーク総量、各地域範囲別ネッ

トワーク量）を従属変数として分散分析を行ない、有意な関連が見られた属性について数量化類による分析を行った（表7）

ネットワーク総量については「家計状況」が良好であるほどネットワーク量が高い傾向が見られた。このような傾向は、フィッシャー<sup>21)</sup>や松本<sup>22)</sup>の知見を再確認するものであるが、自営業者が多い職住近接地域においても同様の傾向がみられたことは新しい知見であろう。また「性別」が女性であることが正の効果を与えていた。

居住地内のネットワークについては、最も身近な範囲である近隣ネットワークとその外側に位置する学区ネットワークでは効果要因が異なることが明らかとなった。

近隣ネットワークにおいて「年齢層」が高齢であることが正の効果を与えているのは、相対的に居住年数が高くなることにより、住居近くでのネットワークが密に形成されることおよび高齢化による身体機能の低下により、近隣範囲でのつきあいが多くなることの両方によるものであると考えられる。

表7：パーソナルネットワークの要因分析（数量化 類）

外的水準			ネットワーク総量	居住地ネットワーク		地域外ネットワーク					
				近隣	学区	市内	市外				
計算式の有意水準			0.000.	0.000.	0.001.	0.001.	0.000.				
重相関係数			0.052.	0.128.	0.008.	0.114.	0.168.				
変数の種類	アイテム	カテゴリ	度数	カテゴリスコア	レンジ	カテゴリスコア	レンジ	カテゴリスコア	レンジ		
基本属性	性別	男性	94	- 0.040	- 0.073**						
		女性	105	0.033							
	年齢層	20-39歳（若年層）	33		- 0.126	0.247***		- 0.051	0.129	0.053	0.121**
		40-54歳（壮年層）	43		- 0.024			0.023		0.056	
		55-64歳（熟年層）	50		0.009			0.009		- 0.005	
		65-74歳（前期高齢層）	52		0.057			- 0.001		- 0.065	
		75歳以上（後期高齢層）	25		0.122			- 0.091		- 0.035	
	職業	会社員・公務員	41				- 0.099	0.089**		0.028	0.213***
		自営業	56				0.071			- 0.069	
		無職・家事専業	80				- 0.002			0.000	
		パート・アルバイト	21				- 0.010			0.144	
	就学歴	小・中学校卒	36		- 0.031	0.050		- 0.023	0.2563**	0.023	0.044
高校・専門学校卒		107		0.019			- 0.043		- 0.017		
短大・大学・大学院卒		54		- 0.028			0.1143**		0.027		
家族構成 (同居の有無)	配偶者 同居している	137				0.029	0.088**		0.025	0.038	
	同居していない	70				- 0.059			- 0.012		
	高校生以下 の子供・孫 同居している	29					- 0.052	0.151			
	同居していない	51					0.027				
生活関連指標	家計状況 良い	56		0.084	0.123**				0.019	0.125***	
	普通	115		- 0.039					- 0.035		
	悪い	35		0.031					0.090		

偏相関係数が有意なアイテムに\*を記した。（\* $p < 0.10$ ，\*\* $p < 0.05$ ，\*\*\* $p < 0.01$ ）

一方、学区内においては「職業」が自営業者であることが大きな正の効果を与えている。これは、自営業主層と雇用者層の友人ネットワークの相違を分析した田中<sup>23)</sup>の知見とも一致するものである。特に本調査地は京染め等伝統工芸の盛んな地域であり、製造の分業関係、取引関係を通じて職人同士のつながりが密であることがさらに傾向を強めていると考えられる。

また、学区内において「配偶者」の存在が正の効果を与えている。これをさらに詳しく分析すると、女性について「配偶者」の存在が学区でのネットワーク量に大きく関連している。このことから、女性にとって学区内での人間関係は、夫の人間関係に伴う従属的なものであることが推測される。家事専業の女性が多いことがこのような傾向につながっていると考えられる。

既存研究においては、本稿で定義する「学区」範囲程度を近隣づきあいとして定義する場合が

多く、結果として本稿における「近隣」と「学区」を合わせたような知見が得られていることが多い。本稿の結果を一般化できるか更なる検討が必要であるが、居住地を「近隣」「学区」を分離し、その差異を記述することができたことは大きな成果であると考えられる。

地域外ネットワークについては、市内ネットワークについて「就学歴」が「短大・大学・大学院卒」であることが正の効果を与えている。松本<sup>24)</sup>は市外ネットワークについて「就学歴」の高さが正の効果を与えるとの知見を得ていたが、本稿においては「就学歴」は市外ネットワークではなく、市内ネットワークに有意な効果を与えていた。

京都市には短大・大学等の高等教育機関が非常に多く集まっており、本能学区の「短大・大学・大学院卒」者についても、その多くが京都市内の大学に就学していたと考えられる。このことが市外ネットワークではなく市内ネットワ

ークに対して「就学歴」が効果を与えていることにつながっている可能性も仮定できるが、その正誤については検討が必要であろう。

また市外ネットワークについて「職業」が「会社員・公務員」「パート・アルバイト」であることおよび「家計状況」が正の効果を、「年齢層」が55歳以上であることが負の効果を与えている。これは自営業者が職住近接であり、「会社員・公務員」と比較して遠距離の人間関係を築く機会が少ないことを反映していると考えられる。「家計状況」の効果については、Fischer<sup>25)</sup>、松本<sup>26)</sup>の知見を再確認するものである。「年齢層」については高齢化による生活圏の縮小が影響していると考えられるが、高齢層の多くは過去「自営業者」あるいはその配偶者であったと考えられ、職業による市外ネットワーク量の差異が履歴効果として影響を与えている可能性も考えられる。

- 2 . パーソナルネットワーク構造による住民の類型化

- 2 - 1 . 類型化の実施

前節で一戸建て・長屋住民のパーソナルネットワークの構造が様々な属性によって規定されることが検証された。本節では、一戸建て・長屋住民がパーソナルネットワークの構造により、具体的にどのように類型化できるかを検討する。

地域範囲別ネットワーク量（近隣，学区，市内，市外）を対数変換したものを投入変数としてグループ間平均連結法によるward法クラスター分析により行い、一戸建て・長屋住民を4類型に分類した。

表8は、各タイプのネットワーク総量および地域範囲別ネットワーク量（対数変換済み）の平均値である。

第1類型は、特に京都市外のみネットワークの存在が顕著であるため、「市外ネットワーク単独型」と名づけた。

第2類型は、第一グループと似ているものの、市外だけでなく市内についてもネットワークの存在が顕著であるため、「地域外ネットワーク型」と名づけた。

第3類型は一戸建て・長屋住民の居住地（近隣，学区）および市内に広く浅くネットワークが存在することから、「居住地・市内ネットワーク型」と名づけた。

第4類型は、ネットワーク総量が多く、各地域範囲に広くネットワークを保持していることから、「大規模ネットワーク型」と名づけた。この型は学区および市外のネットワーク量が特に多いのも特徴である。

・なおマンション住民は、市外および市内においてネットワークの存在が顕著であり、パーソナルネットワークの構造については「地域外ネットワーク型」と類似している。

表8：パーソナルネットワーク類型別ネットワーク量の比較

パーソナルネットワーク類型	ネットワーク総量	居住地		地域外	
		近隣	学区	市内	市外
市外ネットワーク単独型 (N=38)	0.58	0.05	0.03	0.14	0.49
地域外ネットワーク型 (N=31)	0.85	0.09	0.04	0.67	0.49
居住地・市内ネットワーク型 (N=106)	0.56	0.22	0.21	0.25	0.05
大規模ネットワーク型 (N=10)	1.24	0.41	0.90	0.69	0.49
マンション居住者 (N=50)	0.71	0.16	0.09	0.38	0.35
有意確率	***	***	***	***	***

各ネットワーク量を常用対数によりlog (X+1)で対数変換の上、分散分析を実施。(\*p < 0.10, \*\*p < 0.5, \*\*\*p < 0.01) 値は小数第3位を四捨五入。

- 2 - 2 . ネットワーク類型と属性の関連

それでは、具体的にパーソナルネットワーク類型と属性の間にはどのような関連があるのであろうか。クロス表のカイ二乗検定により、ネットワーク類型と有意な関連が認められた属性は以下の3つである。（表9）

職業：「会社員・公務員」および「パート・アルバイト」の過半数は、市外ネットワーク単独型、地域外ネットワーク型といった居住地外での人間関係を中心とするパーソナルネットワーク類型が過半数を占めている。一方、自営業、無職・家事専業は、居居住地・市内ネットワーク型が60%～70%を占めており、相対的に比較的居住地での人間関係をしている場合が多い。

年齢層：壮年層（40～54歳）までは、市外ネットワーク単独型、地域外ネットワーク型といった居住地以外での人間関係を中心とするネ

ットワーク類型が半数前後を占めるが、前期高齢期（65～74歳）以降になると、居住地に人間関係の中心を持つ「居住地・市内ネットワーク型」が過半数を超える。居住年数（年代効果）、若年層の職業に「会社員・公務員」が多いことも関係していると考えられる。

配偶者と同居の有無：配偶者と同居していない回答者は、市外ネットワーク単独型、地域外ネットワーク単独型など、居住地以外での人間関係を中心とするパーソナルネットワーク類型が多くなっている。

- 3 . パーソナルネットワークを構成するつきあいの種類

まず、一戸建て・長屋住民とマンション住民を比較する。（表10）

一戸建て・長屋住民、マンション住民ともに「友人づきあい」が、ネットワーク全体の70%

表9：パーソナルネットワーク類型と関連の深い属性

属 性		市外ネットワーク	地域外	居住地・市内	大規模	
		単独型	ネットワーク型	ネットワーク型	ネットワーク型	
職業***	会社員・公務員	31.4%	25.7%	40.0%	2.9%	(N=35)
	パート・アルバイト	33.3%	22.2%	38.9%	5.6%	(N=18)
	無職・家事専業	20.3%	14.5%	62.3%	2.9%	(N=69)
	自営業	7.5%	13.2%	69.8%	9.4%	(N=53)
年齢層***	若年層（20-39歳）	31.0%	27.6%	37.9%	3.4%	(N=29)
	壮年層（40-54歳）	21.1%	23.7%	47.4%	7.9%	(N=38)
	熟年層（55-64歳）	28.9%	8.9%	55.6%	6.7%	(N=45)
	前期高齢者層（65-74歳）	2.3%	11.4%	81.8%	4.5%	(N=44)
	後期高齢者層（75歳以上）	22.7%	13.6%	59.1%	4.5%	(N=22)
配偶者と同居の有無**	配偶者なし	30.2%	22.2%	46.0%	1.6%	(N=63)
	配偶者あり	15.7%	14.0%	62.8%	7.4%	(N=121)

カイ二乗検定による母比率の平均の検定。（\*p < 0.10, \*\*p < 0.5, \*\*\*p < 0.01）

表10：パーソナルネットワークを構成する「つきあいの種類」（地域範囲別）

住民の種類	ネットワークの地域範囲別	親類づきあい	友人づきあい	近所づきあい	職場づきあい		
一戸建て・長屋住民***	居住地	近 隣	3.3%	29.3%	65.9%	1.6%	(n=123)
		学 区	3.2%	91.0%	5.8%		(n=100)
	地域外	市 内	15.8%	72.5%	0.7%	11.1%	(n=155)
		市 外	13.4%	78.9%	1.4%	6.2%	(n=100)
マンション住民***	居住地	近 隣	6.3%	43.8%	50.0%		(n=32)
		学 区		68.8%	31.3%		(n=16)
	地域外	市 内	13.3%	73.5%		13.3%	(n=98)
		市 外	8.2%	76.5%	2.0%	13.3%	(n=98)

カイ二乗検定による母比率の平均の検定。（\*p < 0.10, \*\*p < 0.5, \*\*\*p < 0.01）

以上を占めている。一戸建て・長屋住民について地域範囲別につきあいの種類を比較すると、学区、市内、市外については、「友人づきあい」が70～90%を占めるのに対して、近隣では、逆にネットワーク全体の65%強が「近所づきあい」となっている。このことから、つきあいの種類からみたパーソナルネットワークの分類点は、近隣-学区の間であり、同じ居住地に存在するネットワークでも、学区ネットワークにおいては選択性の高い「友人づきあい」が主となっていることが分かる。

一方、マンション住民については、近隣・学区の双方で「友人づきあい」と「近所づきあい」が二極化している。このことからマンション住民においては、つきあいの種類からみたパーソナルネットワークの分類点は、学区-市内の間であることがわかる。居住地（近隣・学区）においては、選択性の高い「友人づきあい」を志向する一方で、空間的範囲に規定された「近所づきあい」のネットワークも存在し、パーソナルネットワークの種類が二極化していることが伺える。

次にパーソナルネットワーク類型ごとに構成するつきあいの種類を比較する。特徴的なのが「大規模ネットワーク型」である。他の類型が「近所づきあい」を全て近隣ネットワークの最も特徴的なつきあい方として挙げているのに対して、大規模ネットワーク型のみ、近隣ネットワークにおいても「友人づきあい」が過半数を

占めている。

しかしながら、「大規模ネットワーク型」は「近所づきあい」をしている近隣ネットワークの平均数については「居住地・市内ネットワーク型」と並んで高い値となっている。

このことから「大規模ネットワーク型」は、近隣地域において「近所づきあい」に上積みする形で、選択的な人間関係である「友人づきあい」を築いていることが伺える。

### ・パーソナルネットワークの機能分析

本節では、パーソナルネットワークがネットワーク保持者にどのようなソーシャルサポートを提供しているかを分析する。

#### - 1. ポジティブサポート

表11は、地域範囲別ネットワークからどのようなポジティブサポートを獲得しているか、一戸建て・長屋住民とマンション住民で比較したものである。

交遊サポートについては、一戸建て・長屋住民、マンション住民共に、居住地、地域外のネットワーク双方から高い割合でサポートを獲得していた。これは一緒に交遊するという行動が、人間関係を成立させるきっかけとして大きな割合を占めていること、さらには情緒的サポートと比較して人間関係が深まる前でも比較的容易に踏み込めるためではないかと考えられる。

表11：ポジティブサポートの獲得状況（地域範囲別）

住民の種類	ネットワークの地域範囲別分類		交遊サポート	情緒的サポート			手段的サポート			
				相談	激励	安息	物質的援助	サービス提供	看護・看病	
一戸建て・長屋住民	居住地	近隣	58.5%	27.5%	35.9%	26.8%	4.2%	17.6%	7.0%	(n=190)
		学区	66.5%	38.9%	33.5%	38.3%	0.6%	8.4%	1.8%	(n=282)
	地域外	市内	76.3%	53.4%	48.9%	44.3%	5.6%	10.4%	6.4%	(n=688)
		市外	82.7%	55.5%	56.5%	52.2%	6.6%	14.3%	7.6%	(n=547)
マンション住民	居住地	近隣	83.9%	19.4%	35.5%	19.4%		16.1%	6.5%	(n=56)
		学区	76.9%	38.5%	38.5%	53.8%		15.4%		(n=29)
	地域外	市内	75.5%	51.0%	57.3%	53.9%	4.5%	18.0%	3.4%	(n=232)
		市外	87.6%	55.1%	57.3%	53.9%	4.5%	18.0%	3.4%	(n=249)

次に情緒的サポートと手段的サポートについてみると、一戸建て・長屋住民では情緒的サポートについては地域外ネットワークから高い割合でサポートを得ており、居住地ネットワークからの獲得率は少ない。一方で、手段的サポートの中のサービス提供（生活の用事を手伝ってくれた）については、近隣ネットワークが他のネットワークを上回る割合となっている。

これは、地域外ネットワークのほとんどが友人づきあいであるのに対して、近隣ネットワークの多くは近所づきあいであり、生活の用事を手伝いあうことを重視する関係であるためと考えられる。

マンション住民については、情緒的サポート・手段的サポートともに地域外ネットワークについて獲得率が高い傾向にあった。

次に、パーソナルネットワーク類型ごとに、ポジティブサポートの獲得状況を比較する。

類型により、各サポートの獲得量については大きな差異が見られた。（表12）

交遊サポートおよび情緒的サポートの全項目について、居住地・市内ネットワーク型のサポート獲得量が有意に低かった。また、市外ネットワーク型も、交遊サポートおよび激励を除く情緒的サポート項目についてサポート獲得量が有意に低かった。

逆に地域外ネットワーク型は交遊サポートお

よび情緒的サポートの全項目について、サポートの獲得量が有意に高かった。（手段的サポートのうち物的援助、サービス提供については、分散分析は有意なもの、類型間の具体的な差は検出できなかった。また、看護・看病については、分散分析においても有意な差は検出できなかった。）

## 2. ネガティブサポート

一戸建て・長屋住民とマンション住民を比較すると、近隣ネットワークに対するネガティブサポートが非常に特徴的である（表13）。一戸建て・長屋住民では、近隣にネガティブサポートを感じている人のうち50%弱が「世話を焼きすぎる」を選択している。逆に近隣においては「おつきあい気を使う」は、学区、市内、市内よりも際立って少ない。このことから、近隣においての煩わしいおつきあいは近所づきあいであり、日常生活におけるサポートが過度、あるいは望まれないまま行われていることへの不満であることが分かる。

一方、マンション住民については、近隣ネットワークにおいて「世話を焼きすぎる」はほとんど選択されていない<sup>27)</sup>。

表12：パーソナルネットワーク類型別ポジティブサポート獲得状況

パーソナルネットワーク類型	交遊サポート	情緒的サポート			手段的サポート		
		相談	激励	安息	物質的援助	サービス提供	看護・看病
市外ネットワーク型	0.40-	0.34-	0.34	0.28-	0.09	0.12	0.10
地域外ネットワーク型	0.68++	0.58++	0.51++	0.51++	0.11	0.13	0.11
居住地・市内ネットワーク型	0.34-	0.24-	0.25-	0.23-	0.01	0.06	0.04
大規模ネットワーク型	1.01++	0.72	0.58	0.57	0.03	0.36	0.03
マンション居住者	0.61++	0.41++	0.40	0.37	0.06	0.16	0.06
有意確率（分散分析）	***	***	***	***	***	***	***

各サポート量を常用対数により  $\log(X+1)$  で対数変換の上、分散分析を実施（\* $p < 0.10$ ，\*\* $p < 0.5$ ，\*\*\* $p < 0.01$ ）  
+/- < 0.05，+/- < 0.01 tanhaneによる多重比較。他のパーソナルネットワーク類型と有意な差があった場合に表示。  
値は小数第3位を四捨五入。

表13：ネガティブサポートの獲得状況（地域範囲別）

住民の種類ネットワークの地域範囲別分類			イライラさせる	文句を言う	世話を焼きすぎる	迷惑をかける	おつきあいに気を使う	
一戸建て・ 長屋住民***	居住地	近隣	48.4%	41.9%	48.4%	25.8%	35.1%	(n=31)
		学区	50.0%	40.0%	10.0%	10.0%	70.0%	(n=10)
	地域外	市内	40.9%	36.4%	18.2%	18.2%	68.2%	(n=22)
		市外	33.3%	25.0%	8.3%	41.7%	58.3%	(n=12)
マンション 住民***	居住地	近隣	33.3%	22.2%	11.1%	0.0%	44.4%	(n=9)
		学区	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	(n=2)
	地域外	市内	57.1%	35.7%	7.1%	35.7%	64.3%	(n=14)
		市外	70.0%	30.0%	30.0%	40.0%	30.0%	(n=10)

・ パーソナルネットワーク・ソーシャルサポートとひとづきあいの満足度の関連

それでは、これらパーソナルネットワークおよびソーシャルサポート（ポジティブサポート・ネガティブサポート）は、ひとづきあいの満足度にどの程度関連があるのであろうか。

表13は、パーソナルネットワーク類型ごとに、パーソナルネットワークに対する自己評価を比較したものである。

分析を始める前の仮説設定では、前節（表12）において、居住地内・市内ネットワーク型、市外ネットワーク型の2類型について、ポジティブサポートの獲得量が特に少なかったことから、この2類型が統計上有意にひとづきあいの満足度が低いと予測していた。

しかし、実際にひとづきあいの満足度を比較して見ると、市外ネットワーク型については大規模ネットワーク型と比較して有意に得点が低かったものの、居住地内・市内ネットワーク型については、大規模ネットワーク型と比較して有意な得点差がないばかりでなく、パーソナルネットワーク獲得量において統計上有意な差を

つけられていた地域外ネットワーク型よりもひとづきあいの満足度が高いことが明らかになった。（表14）

このような上記の分析結果を踏まえると、ポジティブサポートの獲得量がひとづきあいの満足度に明確な正の関係を与えていない可能性が考えられる。

そこで上記の仮説を検証するために、相関係数を利用して一戸建て・長屋住民について、ひとづきあいの満足度と各種パーソナルネットワーク量（総量、地域範囲別）、各ソーシャルサポート獲得量（ポジティブサポート・ネガティブサポート）との関連性を検証した。（表15）その結果、以下のような点が明らかとなった。

ひとづきあいの満足度と正の相関関係が有意な変数は、

- 近隣ネットワーク量
- 学区ネットワーク量

であり、市内ネットワーク量、市外ネットワーク量および各ポジティブサポートの獲得量はひとづきあいの満足度と明確な関連が見られなかった。

表14：ひとづきあいの満足度（パーソナルネットワーク類型別）

パーソナルネットワーク類型	ひとづきあいの満足度
市外ネットワーク型	3.53-
地域外ネットワーク型	3.71
居住地・市内ネットワーク型	3.89
大規模ネットワーク型	4.44++
マンション居住者	3.54-
有意確率（分散分析）	***

ひとづきあいの満足度を従属変数として分散分析を実施（\*p < 0.10, \*\*p < 0.5, \*\*\*p < 0.01） +/- < 0.05, ++/- < 0.01 DutnettT3による多重比較。他のパーソナルネットワーク類型と有意な差があった場合に表示。値は小数第3位を四捨五入。



表 15：人づきあいの満足度と関連の深い変数

変数の種類	変数名	ひとつきあいの満足度		
パーソナルネットワーク関連変数	ネットワーク量	パーソナルネットワーク総量	0.108	
		近隣ネットワーク	0.198**	
		学区ネットワーク	0.186**	
		市内ネットワーク	0.031	
		市外ネットワーク	- 0.048	
	ポジティブサポート量	交遊サポート	0.129	
		相談サポート	0.062	
		激励サポート	- 0.045	
		安楽サポート	0.048	
		物的支援	- 0.001	
		サービス提供	- 0.031	
		看病看護	- 0.003	
	ネガティブネットワーク関連変数	ネットワーク量	ネガティブネットワーク総量	- 0.199**
			近隣ネットワーク（ネガティブ）	0.053
学区ネットワーク（ネガティブ）			0.166	
市内ネットワーク（ネガティブ）			- 0.212	
市外ネットワーク（ネガティブ）			- 0.062	
ネガティブサポート量		あなたをイライラさせる	- 0.044	
		小言や文句を言う	0.042	
		余計な世話を焼く	0.044	
		あなたに迷惑をかける	0.033	
		おつきあいに気を使う	- 0.107	

personの相関係数（両側）（ $p > 0.10^*$ ， $p > 0.05^{**}$ ， $p > 0.01^{***}$ ）

一方、ひとつきあいの満足度と負の相関関係が有意な変数は、

ネガティブなネットワークの総量であった。

上記の変数が、ひとつきあいの満足度の規定要因であるかを確認するために、 $r$ を独立変数としてひとつきあいの満足度を従属変数とする重回帰分析を行った。（近隣ネットワーク量 学区ネットワーク量については相関が $r > 0.3$ であったため、両変数を合成して居住地ネットワーク量という新変数を作成し投入した。）（表 16）

表 16：人づきあいの満足度の要因分析

独立変数	標準偏回帰係数	VIF
居住地のパーソナルネットワーク量	0.271***	1.004
ネガティブネットワーク総量	- 0.174**	1.004

（重相関係数：0.110。分散分析による有意確率：.000。）

標準偏回帰係数の有意水準（\* $p < 0.10$  \*\* $p < 0.05$ ，\*\*\* $p < 0.01$ ）

分析の結果、居住地ネットワーク量は正の関連で、ネガティブネットワーク量は負の関連で

それぞれひとつきあいの満足度に対して統計的に有意な関連を持つことが判明した。

本節の分析結果から以下のような結論が導き出せよう。

各ポジティブサポートの獲得量自体はひとつきあいの満足度に明確な正の影響を及ぼさない

一戸建て・長屋住民にとって重要なパーソナルネットワークは、近隣・学区といった居住地内のネットワークである。

ネガティブサポートは、その総量としてひとつきあいの満足度に負の影響を与える。

このように、ポジティブサポートの獲得量ではなくパーソナルネットワーク自体の総量がひとつきあいの満足度に影響を与えているということは、パーソナルネットワークから本稿で設定したポジティブサポートに該当しない隠れた効用が提供されていることを示唆している。今後の課題としては、このような効用が果たしてどのようなものなのか、特に人と人との相互作用そのものから得られる効用なのかあるいは人

間関係を獲得することによって間接的に獲得される心理的な満足感なのかを明らかにし、このような効用を計測する分析の枠組みを構築することが必要である。

上記と関連して、本稿で調査した「親しい」人間関係のネットワークの背後に存在する「親しいとはいえないが知り合いである」人間関係の影響についても留意することが必要であろう。特に、「居住地内・市内ネットワーク型」は自営業者、熟年・高齢層が中心であり、居住地においていわゆる「道であつたら声を掛け合う」程度の浅い人間関係を膨大に保持している可能性が考えられる。パーソナルネットワーク研究によって同定できる「親しい人間関係」と、その背後の「浅い人間関係」の双方を同時に分析し、生活満足関連指標（ひとづきあいの満足度、生活満足度）との関連を分析することが今後の課題である。

### ・まとめと考察

本稿の目的は、現在の都市において地域互助の活用を考える際の一視点として、パーソナルネットワーク分析の手法を用いて都市住民のパーソナルネットワークを構造面・機能面から分析し、その中での居住地ネットワークの位置づけを明らかにするものであった。

そのために パーソナルネットワーク量に対する規定変数の抽出 パーソナルネットワーク構造による住民類型化および関連属性の抽出 ソーシャルサポート概念を利用した正負両面からのパーソナルネットワークの機能評価を行った。

このうち、 については、ネットワーク総量についての「家計状況」、学区ネットワークにおける「職業」、市外ネットワークについての「家計状況」など既存研究の知見を再確認することができた。また、学区ネットワークにお

ける「配偶者の有無」、市内ネットワークにおける「就学歴」など本能学区の地域的特性が関連していると考えられるパーソナルネットワークへの規定要因を明らかにすることができた。これについては今後、地域的特性がどのような因果関係を通じてパーソナルネットワーク量に効果を与えているのかを検証することでパーソナルネットワーク研究の大きな知見となる可能性が考えられる。

またこれまで大きなくくりでまとめられてきた「地域」を、近所づきあい中心の習慣的で手段的サポートの担い手となっている「近隣」と市内や市外など「地域外」と同じく友人づきあいを中心とした選択的なつきあいが中心の「学区」に明確に分離し、記述できたことは重要な知見であったと考えられる。

についてはクラスター分析の使用により、複数の変数からなるネットワーク構造をわかりやすく整理し素描することができた。本稿においては、属性とネットワーク類型との関係はクロス集計によって単純に素描したが、実際に地域互助による生活課題解決の可能性を探る際には、このようなパーソナルネットワーク構造による類型化を都市度や都市構造等のコントロール変数を踏まえた上で一般化し、ロジスティック回帰分析などを通じ規定要因を明確化することが重要であると考えられる。

については住民類型ごとにパーソナルネットワークから得ている正負の作用を記述することには成功したものの、パーソナルネットワークのサポートが、人的資源としてネットワーク保持者にとってどのような価値を持っているかを計測するまでには至らなかった。

地域互助による生活課題解決の可能性を考える際には、ソーシャルサポート獲得量と生活満足関連指標（ひとづきあいの満足度、生活満足度等）との関連を明確にすることは必要不可欠

であり、今後、課題が残る結果となった。

本稿においては、パーソナルネットワークを構造と機能の両面から記述するという目的設定上、パーソナルネットワーク構造により類型化した住民群を対象に正負ソーシャルサポートの獲得量を分析する手法をとったが、受け手であるパーソナルネットワーク保持者本人が、現在ソーシャルサポートを必要とする生活状況におかれているか否かでソーシャルサポートの重要性は大きく変容すると考えられる。今後の課題としては家族構成、経済状態、健康状態などソーシャルサポートの必要性を左右すると考えられる変数に注意深く着目し、繊細な仮説設定に基づいてソーシャルサポートと生活満足関連指標との関連を明らかにしていくことが必要となる。

また一方で、パーソナルネットワーク研究で計測できる「親しい人間関係」の背後にある幅広い人間関係についても同時に把握し、その効用（例えば親しいとはいえないものの、知り合いが多く存在する安心感など）についても概念として明示化し、分析することが必要であろう。

## 注

- 1) 防災研究においては、阪神大震災の事例研究（今野裕昭，2001）（倉田和四生，1996）をもとに災害時における地域社会の重要性に注目が集まり、「防災コミュニティ」といった用語で表されるような災害時の「地域互助」を前提とした地域社会づくりが議論されている。
- 2) 高齢者支援における「地域互助」の必要性については、主に老年社会学等の分野で、ソーシャルサポート提供源（古谷野亘，1991）やステイグマ性（公的専門サービス特有のギクシャク感）の回避手段（小川全夫，1996）として高齢者のQOLと絡めて議論されている。
- 3) 多くは特定の生活課題の解決手段として「地域互助」を活用しようというものであるが、「地域通貨」運動に代表されるように特定の生活課題を対象を絞らず、都市住民の生活様式における「地域互助」領域の拡大自体を自己目的化している事例も存在する。
- 4) 地域互助の過大評価の危険性および、地域社会、地域互助の過大評価に都市社会学が与えた影響については、（大槻知史，2003）を参照のこと。
- 5) 老年社会学等において個人の人間関係をソーシャルサポートと絡めて議論される場合は、パーソナルネットワークではなく「社会的ネットワーク」（ソーシャルネットワーク）という語句を使用する機会が多い。しかし都市社会学において「社会的ネットワーク」という場合は、個人と個人の間のみでなく個人と社会集団や行政諸機関との関係を含めたネットワークを指す機会が多い。本稿では混乱を避けるために、個人と個人の人間関係であるという含意を込めて「パーソナルネットワーク」という語句を使用する。
- 6) 「住民と地域社会との関係」は、「個人 - 個人」の関係と「個人 - 集団・組織」の関係の2側面から捉えることができよう。「個人 - 個人」の関係とは、住民が他の住民個々人と取り結ぶ関係である。一方、「個人 - 集団・組織」の関係とは、住民が自治会・町内会など集団・組織としての地域社会と取り結ぶ関係である。  
本稿は、このうち「個人 - 個人」の関係を焦点を絞って分析するものであるが、実際に、住民の生活課題解決のために地域互助の活用を考える際には、「個人 - 個人」「個人 - 集団・組織」の両面から、都市住民にとって地域社会がどのような位置づけにあるかを分析する必要がある。（詳細は、（大槻知史，2003）を参照のこと。）
- 7) 大谷の研究など多数（大谷信介，1992）
- 8) もちろん、個人属性とネットワーク量の関係を見る研究を否定しているわけではなく研究目的の差異である。また、最終的に具体的な生活課題の改善にパーソナルネットワークを活用しようとする際には、老年社会学などで行われる分析対象を絞り込んだ上で規定要因を仮説検証する研究が不可欠なのはいうまでもない。
- 9) 例えば、坂田周一・Jersey liang・前田大作，1990
- 10) 野口裕二，1991a
- 11) 野口裕二，1991a
- 12) 今野裕昭，2001
- 13) 調査時には、ネットワークの詳細を訊く設問に

- において京都市内、京都市外という選択肢を設けて分類した。
- 14) 京都市総合企画局情報化推進室情報統計課推定 (H15年度9月)
- 15) 京都市総合企画局情報化推進室情報統計課推定 (H15年度9月)
- 16) 平成12年度国勢調査による
- 17) 平成12年度国勢調査による
- 18) パーソナルネットワーク調査では、先にパーソナルネットワーク総量を回答してもらい、その後、詳細項目を回答してもらう方法が一般的であるが、この方法だと先にパーソナルネットワーク総量を概算(もしくは何となくのイメージ)で回答し、その後、回答したネットワーク総量につつまを合わせる形で詳細項目を回答することになるため、ネットワーク総量の信頼性の観点から今回はこの方法を取らなかった。
- 19) 国勢調査での男女比・年齢比は居住形態別になっておらず、一戸建て・長屋建て住民のみについてその構成を把握することは困難である。
- 20) 分析対象とする独立変数を2値データに置き換え、相関係数が $r < 0.3$ であることを確認した。
- 21) Fischer.Claude s,1982
- 22) 松本康, 1992
- 23) 田中恵, 2000
- 24) 松本康, 1992
- 25) Fischer.Claude s,1982
- 26) 松本康, 1992
- 27) パーソナルネットワーク類型ごとの比較についてはサンプル数が少ないため省略する。また、パーソナルネットワーク類型ごとのネガティブサポートの獲得については分析したものの有意な差は存在しなかった。
- 活課題解決の可能性を探る基礎として」,『政策科学』11-2
- 小川全夫(1996),『地域の高齢化と福祉 高齢者のコミュニティ状況』,恒星社厚生閣山本和郎(1986),『コミュニティ心理学 地域臨床の理論と実践』,東京大学出版会
- 加藤敏春(2001),『エコマナーの新世紀 “進化”する21世紀の経済と社会』,勁草書房
- 金子勇・森岡清志編(2001),『都市化とコミュニティの社会学』,ミネルヴァ書房
- 公文俊平(1978),『社会システム論』,日本経済新聞社
- 倉田和四生(1995),『阪神大震災とコミュニティ活動』,『関西学院大学社会学部紀要』73
- 今野裕昭(2001),『インナーシティーのコミュニティ形成 神戸市真野住民のまちづくり』,東信堂
- 坂田周一・Jersey Liang・前田大作(1990),『高齢者における社会支援のストレス・バッファ効果 肯定的側面と否定的側面』,『社会老年学』31, pp.80-90
- 鈴木広(1986),『都市化の研究』,恒星社厚生閣
- 鈴木広・倉沢進・秋元律郎編(1987),『都市化の社会学理論』,ミネルヴァ書房
- 田中恵(2000),『自営業主層と雇用者層の友人ネットワーク』,森岡清志編,『都市社会のパーソナルネットワーク』,東京大学出版会
- 玉野和志(1995),『ネットワーク分析と社会層の視点』,『都市問題』86-9, 1995, pp.17-26
- 直井優(1990),『構造 機能主義による説明とテスト可能性』,『社会学評論』35
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘(2000),『高齢期における親しい関係 “交遊” “相談” “信頼” の対象としての他者の選択』,『老年社会学』22-3, pp.367-374
- 野口裕二(1991a),『高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定』,『社会老年学』34, pp.37-38
- 野口裕二(1991b),『高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート』,『老年社会学』13, pp.89-105
- 古谷野亘(1991),『社会的ネットワーク』,『老年社会学』13, pp.68-76
- 松本康(1992),『アーバニズムと社会的ネットワーク 名古屋調査による“下位分化”理論の検証』,『名古屋大学文学部論文集』哲学38, pp.161-185
- 松本康編(1995),『増殖するネットワーク』,勁草書房

## 参考文献

- 有末賢(1999),『現代大都市の重層的構造』,ミネルヴァ書房
- 安藤延夫編(1979),『コミュニティ心理学への道』,新曜社
- 大谷信介(1992),『都市化とパーソナル・ネットワーク』,鈴木広編,『現代都市を解読する』,ミネルヴァ書房
- 大槻知史(2003),『生活構造論の拡張による「都市における住民と地域社会の関係」についての新たな分析枠組みの提示 “地域互助”による生

- 三浦典子（1984）,「生活構造概念の展開と収斂」,  
『現代社会学』18, pp.5-27
- 森岡清志（1980）,「生活構造の概念」,北海道大学  
文学部社会学研究室刊,『生活構造に関する調  
査研究報告書』
- 森岡清志（1984）,生活構造と生活様式,鈴木  
広・倉沢進編『都市社会学』,アカデミア出版  
会
- 森岡清志（1995）,「都市社会とパーソナルネットワ  
ーク—パーソナルネットワーク論の成果と課題  
」,『都市問題』86-9, pp.3-15
- 森岡清志編（2000）,『都市社会のパーソナルネット  
ワーク』,東京大学出版会
- 安田三郎（1964）,「都市の社会学」,福武直編,『社  
会学研究案内』,有斐閣
- 矢部拓也・西村昌記・浅川達人・安藤孝敏・古谷野  
亘（2002）,「男性高齢者における社会関係の形  
成 「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」  
」,『老年社会学』24-3, pp.319-326
- 山本和郎編（1984）,『コミュニティ心理学の実際』,  
新曜社
- 吉原直樹（1997）,「「転換期」のコミュニティ政策」,  
蓮見音彦,以田貝香門,矢澤澄子編『現代都市  
と地域形成』,東京大学出版会, pp.104-115
- S.A.マレル,安藤延夫訳（1977）,『コミュニティ心  
理学』,新曜社
- Caplan,G.（1974）,*Supportsystem and community  
mental health.Behavioral Publication, New York.*
- Fischer, Claude s.（1982）,*To Dwell among  
Friends:Personal Networks to in Town and  
City,Chicago, IL.:University of Chicago Press.*
- House,J.S（1981）,*Work stress and social support.*  
Addison-Wesley,Mass.

（2003.12.22. 受理）